

「英語教育改善プラン」に基づいた指導と評価の改善に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～群馬県～

CAN-DOリストを活用した指導と評価の実践に課題があり、改善の必要がある。

○課題解決のための具体的な対策

研修の実施
(外部専門機関と連携した
ワークショップ等)



各校によるCAN-DOリスト
の見直しとパフォーマンス
テスト実施報告(年度ごと)

学年	実施校数	実施率
H26	30校	100%
H30	58校	100%

好事例の共有
(公開授業の実施・アイディ
ア集の作成等)



成果

パフォーマンステスト実施校

	話すこと	書くこと
H26	30校	26校
H30	58校	51校

求められる英語力を有する 生徒及び教員の割合

	生徒 (取得)	教員
H26	35.6% (14.4%)	67.3%
H30	40.3% (28.9%)	71.7%

課題及び解決のため の手立て

- ・目標に向けた言語活動の積み重ねに課題がある。
→パフォーマンステスト自体ではなく、テストに至るまでの指導事例を蓄積し、共有する。
- ・評価方法についてのトレーニングが十分ではない。
→引き続き、外部専門機関と連携しながら、研修を実施する。

平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～群馬県立前橋高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・言語活動の高度化を図るため、英語による会話・発表・ディベート等を豊富に体験しコミュニケーション能力を高める。
- ・4技能のバランスの良い育成を図るため、それぞれを結び付けた統合的な言語活動を継続して行う。

具体の取組の内容

- ・AL型授業、ICT機器の利用、英語外部試験の受験奨励、ディベート活動等を推進し、学校全体でコミュニケーション能力を向上させる意識を持つ。
- ・4技能の総合的な評価等にCAN-DOリスト形式での学習到達目標を活用する。
- ・パフォーマンステストを3学年共通して実施する。(インタビュー・プレゼン・エッセイライティングなどを学年に応じて)
- ・教科書で扱ったトピックを中心に、それについての賛成・反対の意見を論理的に整理し、まとめさせる活動(書く、話す)を3学年共通して行う。
- ・様々なディベート形式の活動を授業に取り入れ、表現力、思考力、判断力の育成を目指す。

成果①

- ・英検、TOEIC、TEAPなどの外部試験受験を奨励した。(今年度から、英検準会場としての受験はなし。)

【英検(今年度実績)】

	1級	準1級	2級	準2級
受験者	3名	49名	111名	63名
合格者	1名	17名	75名	58名

- ・1・2年生全員がGTECを検定受験した。(1年生は3技能、2年生は4技能。来年度は1年生も4技能。英語力の定点観測および、生徒の英語学習の動機付けとしたい。)
- ・4技能型の外部試験を目標にすることで、日頃からのアウトプットを意識した学習が身に付いてきている。

成果②

- ・パフォーマンステストの実施により、指導と評価の一体化が図られるようになったため、授業中のスピーキングやライティング学習に対する生徒のモチベーションが上がってきた。(各学年、テストの内容・レベルを工夫しながら、3回程度行った。)
- ・生徒は単に「話す」だけでなく、「いかに論理的に伝えるか」を意識しながら、活動している。
- ・学校評価によると「英語によるコミュニケーション能力が大いに上がった、または上がった」との回答が教員88%、生徒62%であった。

今後の課題・方向性

- ・パフォーマンステストの方法や頻度について更なる検討を行う必要がある。
- ・英語によるコミュニケーションについて、教員による評価に比べると、生徒の自己評価が低いというデータが出ている。授業での活動やテストの評価の結果を、効果的に生徒にフィードバックし、生徒がより自信を持って学習に取り組めるように努めたい。
- ・3年次にCEFR B1以上の力を持った生徒の数をより増やしていくために、CAN-DOリストの見直しを継続的に行う。
- ・ICTを使って、他地域・海外の学校との交流をするなど、意見交換・発表等の場を広げたい、考え方の視野を広げたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～群馬県立前橋東高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・生徒が英語を習得・利用したくなるような双方向性重視の活動をベースにした授業デザインをする。
- ・CAN-DOリストの項目を生徒が達成するための目安となるルーブリックの作成と授業内活動への組み込みを行う。

具体の取組の内容

- ・英語の外部検定試験を生徒が積極的に受験するように働き掛ける。
- ・外部検定試験を生徒の英語学習の動機付けと客観的な英語力評価を得る機会として活用する。
- ・ルーブリック作成について教員間で検討を重ねて、生徒の英語力強化に役立つパフォーマンステストをデザインする。
- ・授業内の活動でどのように評価がなされるのか生徒に伝わりやすいルーブリック内の表現の工夫。
- ・他の研修やプロジェクトを活用して、各教員が意見交換・自己研鑽・授業改善等を行う。
- ・事前にルーブリックを提示した上で生徒の目標を明確化した上でライティングをさせたり、発表を行わせる。
- ・ルーブリックに基づいて生徒同士が相互評価を行うことによるクリティカルシンキングの土台作りを行った。

成果①

年度	2級			準2級		
	'16	'17	'18	'16	'17	'18
受験者	93	108	76	95	80	69
合格者	25	17	26	65	60	49
合格率	27%	16%	34%	68%	75%	71%

英検合格率における変化

- ・2017年度は教員の勧めによる申込みだったためか合格率は落ち込んだ。
- ・2018年度はこの事業を周知させたところ、自ら申し込む生徒が増加したため合格率に表れた。
- ・2級からチャレンジする生徒が増加

成果②

- ・ルーブリックを明確に提示することにより、生徒のコメントから適当な内容のものが減少した。
- ・相互評価がベースとなる活動が増えることで、音読などの意義が生徒に伝わり、活動に活性化が見られた。
- ・ライティングや発表による評価では、十分に準備をする生徒が増えることで、自ら辞書や参考書で調べる姿が見られた。
- ・教員同士による意見交換の機会が増加したことで、授業を更に充実させようとする雰囲気ができた。

今後の課題・方向性

- ・インタラクティブな活動を多く盛り込むことで生徒間で英語を用いるという雰囲気はできるが、どうしても耳にする英語も生徒が発する英語が主なものになるので、今後外部検定のネイティブスピードに近い速さのリスニングに効果的な方法を模索する必要がある。
- ・同様に音読の方法に工夫を入れるために更に教員間で意見交換が必要と感じた。
- ・聞いてすぐに答えるような英語における瞬発力を鍛えるための手立てについて、意見を交換していきたい。
- ・成果①に関して準1級合格者2名と1級挑戦者も出たので、今後も生徒の積極的な挑戦を促していく。
- ・ルーブリックをさらにブラッシュアップする。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・グローバル社会で活躍するために必要な「発信力」を強化するため、4技能統合型の活動を積極的に取り入れる
- ・CAN-DOリスト中の「到達目標」を生徒の実態により合わせるため、常にリストの見直しを図り指導に役立てる

具体の取組の内容

- ・外部検定試験を活用し生徒の客観的な英語力を検証するとともに、試験結果を指導改善に役立てる。
- ・パフォーマンステストの実施方法や評価の在り方を研究する。
- ・教員の研修体制を充実させ、指導力の向上や授業改善に努める。
- ・イングリッシュキャンプや小学校への出前授業等の行事を通じて、英語への学習意欲を高める(英語科の生徒が対象)。

成果①

- ・英検(=希望者受検)合格者数推移

年度	H25	H26	H27	H28	H29
2級	17	17	21	41	45
準2級	57	49	100	102	101

- ・GTEC (=1, 2年生全員受検)

GRADE 4 以上の生徒数推移

H29年度	1年生		2年生	
	6月	12月	6月	12月
Total	42	67	93	143
Reading	30	49	74	100
Listening	38	55	67	128
Writing	185	161	158	157

成果②

- ・英検受検者数が278名(H25年度)から440名(H29年度)へ増加したが、これは生徒の英語学習意欲の高まりを示すものと考えられる。
- ・高校卒業時の英検2級取得率が、普通科の生徒は16%であったのに対し、英語科は48%であった(H29年度)。
- ・英語科の保護者を対象に行った「学校評価アンケート」では、イングリッシュキャンプなどの英語科行事が子供にとって「有意義だった」と答えた保護者の割合が85%に達した(H29年度)。

今後の課題・方向性

- ・スピーキング能力を測定することができる外部検定試験をより積極的に導入して、生徒の更なる意欲向上を図る。
- ・学習段階に応じたパフォーマンステストを引き続き考案するとともに、できるだけ効率的な評価の在り方について研究する。
- ・教科会議の時間等を利用して、教員を対象とする各種研修会で学んだ内容をスタッフ全員で共有できる体制を整える。
- ・これまで英語科の生徒を対象に実施してきた様々な活動(イングリッシュキャンプや小学校への出前授業など)を普通科の生徒に対しても行う方法を模索する。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～群馬県立渋川高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・パフォーマンステストに割く時間の確保とパフォーマンスの内容を公平に評価するための方法の確立が必要なので、適切な教材を使用しながら評価の観点を明確にしていく。

具体の取組の内容

- ・4技能の外部検定試験を活用し、語彙の習得や、音声訓練に対する学習動機を高める。
- ・スピーチやエッセイライティング等のアウトプット活動においてパフォーマンステストを実施することにより、表現力の育成と表現活動に対する動機付けを図る。
- ・負荷をかけた反復練習を4技能バランス良く行い、基礎学力の定着を図る。
- ・定期試験におけるリスニングテストの出題の比重を増やすなど、音声面での言語活動の重要性に対する意識を高める。

成果①

- ・**实用英語検定の受験者数、合格率、取得率の向上**

級	受験者数		合格者数	
	H29	H30	H29	H30
準1級	2	6	2	0
2級	26	38	9	11
準2級	23	59	11	39
3級	3	14	3	14
計	54	117	25	64

注)人数は第1～2回までの結果である

成果②

- ・GTEC4技能検定を、今年度は12月の第3回で、1・2年全員受験とした(昨年度は同時期に1年が4技能、2年が3技能で受験)。実受験人数は今年度1年184名、2年190名。昨年度1年は192名である。
- ・成果については、この結果が得られる2月に、昨年度1年と今年度1年の過年度比較、昨年度1年と今年度2年の、経年比較を行う予定。因みに昨年度1年時4技能でのCEFR対応レベルは、A1・90名、A2・101名、B1・1名であった。

今後の課題・方向性

- ・4技能を統合した形の言語活動を工夫し、練習時間を最大化して定着を図っていく。
- ・状況に応じたやり取りができるコミュニケーション能力を育成するために、即興的な要素を加えながら能動的なアウトプット活動を行う。
- ・CAN-DOリストで到達度目標をできるだけ具体的に提示できるように、評価の観点を明確化していく。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～群馬県立富岡高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・4技能向上を目指すため、CAN-DOリストで到達目標を明確にする。
- ・新入試制度対応に備え、外部機関検定試験等の有効活用を図る。

具体の取組の内容

- ①ALTとのTT授業で積極的に自らの意見を述べることのできる態度の育成。
- ②パフォーマンス、ライティングテスト・リライトング(教科書本文内容の要約)活動を通して英語表現力の育成。
- ③英検の受験を積極的に勧め、GTECを1・2年生で実施。
- ④学年ごとに授業公開期間を設定し、感想等を職員会議で発表。
(3年:6月4日～15日、2年:9月10日～21日、1年:11月5日～17日)

成果①

- ①4技能を意識した授業・考査に取り組めた。
- ②リライトング活動の定着により、学習へのモチベーションが上がった。
- ③模擬試験の結果が上昇してきている。
- ④英検受験者数の増加と準1級合格者がでた。

成果②

平成30年度英検状況

	準1級	2級	準2級
受験数	4	168	122
合格数	1	29	69
合格率	25%	17%	57%

英検受験者数推移

	2級		準2級	
	28年度	29年度	28年度	29年度
受験数	161	200	217	143
合格数	22	46	142	83
合格率	14%	23%	65%	58%

平成28・29年度は第1～3回集計
平成30年度は第1・2回集計

今後の課題・方向性

- ①パフォーマンステストの実施方法・評価方法の基準の検討。
- ②即興性を必要とするスピーキング力を養成する方法・評価基準の設定。
- ③ライティングテストで長く書いた生徒が不利にならないような評価基準の設定。
- ④学力差を考慮した「学習到達目標」基準の検討・設定。